小田実全集〔評論　第36巻〕

生きる術としての哲学

小田実 最後の講義

小田実全集

Makoto Oda

講談社

目次

まえがき……飯田裕康　7

I　世界をどう捉えるか　21
はじめに　22
一　二つの「哲学」　23
二　いま何が問題か　29
三　現場の思想　37
四　イラクと北朝鮮　40

II　人間のための科学技術　49
一　戦争と核兵器　50
二　原爆の「被害者」たち　53
三　ウラニウムのオデュッセイア　59
四　現代科学のあり方　65
おわりに――「人間」の科学へ　69

Ⅲ　戦争主義と平和主義　75
はじめに　76
一　戦争主義と平和主義　78
二　好戦主義の台頭　81
三　古代アテナイの「ミリタリー・サービス」　84
四　市民の軍隊と王様の軍隊　89
おわりに――平和主義の展開　98
Ⅳ　地方自治と市民の政策　105
はじめに　106
一　トポスと地方政治　107
二　「される」側の論理　114
三　人災としての阪神・淡路大震災　118
おわりに――「市民」の政治へ　124
Ⅴ　世界史のなかの日韓関係　131
はじめに　132
一　『黒いアテナ』の衝撃　133

二　ヨーロッパの世界進出　139
三　世界史のなかの朝鮮侵略　144
四　朝鮮侵略をどう認識するか　149

VI　市民の経済と文化　155
はじめに　156
一　三極構造からグローバリゼーションへ　157
二　ハワイ解放闘争と「カウリケ」　161
三　「法人資本主義」と戦後日本の経済発展　166
おわりに――日常の試みから　172

【補】

1　ベトナム戦争と戦後世界　176
はじめに――二つの「戦後」　176
一　不可能な勝利と価値観の転換　179
二　植民地支配と理由のない戦争　184
三　ベトナム戦争と平和思想　191
四　平和主義の新展開　198

2　アジアを見る目　208
一　乗用車と共産党――インド　208
二　レーニン塚――カザフスタン　214
三　ITと貧困――インド　216
四　棄民と核実験――カザフスタン　225
おわりに――日本とアジア　231
あとがき……高草木光一　236
一　リラダンと小田実　236
二　デモクラシーと「市民」　238
三　古代アテナイとの訣別　243
四　作家であること　247
五　本書の構成と内容　250

まえがき

飯田裕康

本書の由来は、二〇〇二年度慶應義塾大学経済学部においておこなわれた講座「現代思想」にある。秋学期一三回の講座は、正規の登録学生、大学院生を含むいわゆる「もぐり」の学生、それに新聞報道や口コミで知って三田にやってきた老若の市民、それらの聴き手、いや参加者約四〇〇名で構成された。講座の運営は、つねに小田さんと議論する場としての教室という位置づけのもとになされた。とはいえ、九〇分という限られた時間のなかで、徹底的な議論は期待すべくもなかったが、教壇上の小田さんの醸し出す一種のオーラは、参加者全員を飲み込み、通常の講義室にはない緊張と集中とが教室全体を覆い、言葉にならない対話がゆきかった。取り上げた問題は多岐にわたったが、どれ一つをとっても、それだけで完結するような閉じた議論は、当然のことながらなされなかった。それに教室の物理的環境として、小田さんは、つねに一段高い教壇上で参加者を見下ろす位置で話されることになったが、いかにもこれは小田さんには似つかわしくないことだった。

こうした教室の情景をあえて書くのは、今まさに私たちを取りまいている知的状況のなかで、大学だけがそこから超然としていることは許されがたいことだという、現代の大学のおかれたシチュエー

ションを明確に表出しようという意図が、この「現代思想」講座に一貫していたからだ。

小田さんは、話の節々に学生に向かって「考えてみようよ」「考えろ」「考えなさいよ」「考えなあかん」というフレーズをしばしば差しはさんだ。小田さんの話は、高邁な現代思想の抽象的な展開、ないし解説ではなかった。小田さんは、なにより教室を考える場として、生きた思想の現場として位置づけて、学生たちとその現場を共に生きていること、したがって共に考えようとしていることを伝えようとしたのだ。小田さんの話を聞く人びとが学生を超えて一般の市民であっても、教室という場を共有するものとしては、何の区別もないことが、実は、まれに見ることとしてここに表されていたのだろう。教室は、小田さんのいい方を借りれば、あまたの思想の現場の一つとして立派に躍動しつづけるものとなったのだ。教壇上の立派な学者の「思想」を聴き取るためではない。小田さんも含めて参加している誰でもが思想の現場を作っているとの想いをもとうとしたのだろう。小田さんも、一回おきに登場されたいま一人の講師たちも、そして参加者全員が、思想の現場を構成する素材にしか過ぎないとの強い思いがみなぎる場だった。

小田さんは、自分のことを思想家などと一度たりともいったことはない。「おれは作家だ」というのがつねだった。小田さんは、こうした職能意識、ある種の役割意識を鮮明に相手に伝えることによって、相手の職能（役割）意識を呼び起こし、「なら同じじゃん」と思わせる。そう思えるところに立ってもらう。「おれは作家や。君らは学生や」といういい方には、大所高所から君たちに何かを伝えるためにここにいるのでない、君たちと同じ土俵に乗っているのだという確固としたメッセージが込められている。小田さんのいる教室は、高い教壇から一方的に「学問的」情報を伝授する場などでは全

くなかった。だから、こうした教室は、まさに参加するための場なのであり、ことばという交換の手段を用いてお互いが対等にかかわり、それぞれの「職能」や役割を超えてゆこうとする場なのであり、参加し交流するものによって創造される「思想の現場」となりえたのだと考えられる。小田さんにとって、教室は、市民社会そのものであり、大学というもので特定されるような世界ではない。そこにいる誰でもが市民としての「生きる術（じゅつ）」を自ずと自覚する場なのだ。そうであるがゆえに教室は、協働し共生する現場そのものなのだ。

これだけのことを述べれば、この本がどういった意図のもとになったかはおわかりいただけるであろう。だが、くどいかもしれないが、本書が小田さんの書斎から生まれたものでなく、大学のキャンパスから生まれたものだということについて、いま少し述べておきたい。

小田さんを迎えた講座は、ここにとりまとめたものが第二シリーズで、前年二〇〇一年にもほぼ同一のコンセプトで講座が開かれた。それは、『ここで跳べ』（飯田裕康・高草木光一編、慶應義塾大学出版会、二〇〇三年）としてまとめられた。学期中、週の後半はあらかた大学の提供する宿舎に住み、そこで原稿も書き人にも会われ、われわれとも気安く交わって思想の現場を広げられた。三田は、小田さんにとってなじみの場所となっていた。慶應義塾大学の三田キャンパス（三田山上ともいう）を少々前屈みに、しかし、きっと前方をにらんでゆっくり歩む彼の姿は、まさしく「三田の小田さん」であった。『何でも見てやろう』の小田さんでもなく、ベ平連の小田さんでもなく、『HIROSHIMA』の小田さんでもない。三田の小田さんであった。小田さんがいる大学、これはいったい何なのか。大学が急

速に変わりつつある現在、比較的短期間のこととはいえ、このことはなんとしてもきちんと総括しておかねばならないことだ。

そもそも、六〇年安保後の一九六〇年代後半から七〇年代にかけての世に言う「大学紛争」の火付け役は、意外にも慶應だった。先鞭をつけた慶應の学費闘争こそ、小さな火種ではあったが、その後の事態の到来を予言するものであった。その時すでに学生は、個別慶應を越えて大学のありようについて鋭い批判を突きつけた。それは連接した医学部への「米軍資金導入問題」で一気に大学全体の問題となった。そして安保だった。学生運動の戦略は大きく変わった。こうしたなかで、いやでも大学は変わってゆかなければならなかったし、それは、既成の大学制度の象徴である教授会の解体にとどまるはずもなかった。

だが、現実は、せいぜいその程度のものであった。そして学生にたいする管理の強化。小田さんのいい方でいえば、大学はまさに現場となった。そこから学問、教育のみならず知そのものへの根底的問い直しが突きつけられることになった。なるほど教授会は解体されたが、学部自治の旧い理念は逆に強化され、かえって大学をめぐる旧来の思想は、ことごとく保守化した。そして大学全体の管理へ、大きく舵は切られた。私学では、とりわけ経営の掌にあたる学校法人の力が相対的に強まった。そして、「マスプロ教育」の浸透である。大学は、まさしく荒廃の一歩を踏み出していた。一方に「学問的」権威の交代は図られたが、他方にところてん式の教育マシーン・人的資本供給マシーンとしての大学があたりまえになった。

しかし、七〇年代は、いわゆるポスト・モダンという曖昧な言葉に一括されるとはいえ、思想の新

たな寄る辺を生みだしてもいたわけである。だが、これは現場の思想とは無縁だったといわねばならない。新鮮な響きの（取りようによっては珍奇な）思想用語を生みだし、論文・著書は量産された。学生たちは、じっくり考える暇もあたえられず、次から次と繰り出される言葉に翻弄され、いつのまにか知性の真の基盤を見失ってしまう。ＩＴ化はそれにいっそう拍車をかけた。これに歩調を合わせるかのように、大学の知の細切れ化が進んだ。知は、消費する対象となった。知の体系性よりも、知の先端性（物珍しさ？）が優位に立った。知の中身よりは、「知」を「情報」として一元化し、それが生み出される技術的プロセスが、本物の知と混同されはじめた。一年間の講義をじっくり反芻しつつ知の自己形成を営むといった考え方は、存在の余地さえなくなってしまった。そしてその先に「バブル」がやってきた。

バブル期はある意味、大学と外部世界との関連が日本の大学史のなかで最も強化された時期で、産官学協同といったスローガンはあたりまえのこととなった。同時に、企業は、ほとんどが営業外収益と見なせるような虚業の収益をもって、「社会的責任」をすなわち Philanthropy を、企業ガヴァナンスを一方でめちゃくちゃなものにし、目を覆うばかりの企業倫理の崩壊をともないながら、しかも差別的に、大学を対象に展開した。国からも企業からも入るところには大量の資金が入ってきた。大学の教育システム（カリキュラム）、研究体制、情報環境はいっきに変わった。

文部科学省が推し進める現在の「21ＣＯＥ」の前身は、すでに長期不況のさなか、一九九〇年代半ばから進められていた。研究拠点形成プロジェクトは、あからさまな大学格差付けプロジェクトだったといってよい。その対象大学として選ばれた大学でさえ、それが大学の知のあり方にどんな変化を

もたらすものか、それをいかなる方向に導く必要があるのかを十分体系的に議論する時間的余裕さえ与えられないまま、つぎつぎと新手のプロジェクトを組み上げることが持続的研究資金導入を保証する不可欠の条件となってしまった。大学の知の主体性は、いったいどこに行ったのかさえ見えなくなってしまい、よくよく考えてみると、行政の網に取り込まれている大学の姿しか見えてこなくなっていた。

「大学には、最先端の科学技術を謳歌するような講座があります。しかし、われわれはその最先端技術を疑う別の発想を身につける必要があると思う。」（本書、『Ⅱ章　おわりに――「人間」の科学へ』）

こうした小田さんの鋭い指摘からほど遠い情況にあることをあきらかにしておかねばならない。

まさしく、こういう時代に、小田さんの大学、「三田の小田さん」が登場したのである。

小田さんを二〇〇一年の第一回の講座にお招きしようと、「特別招聘教授」としての任用を学部の機関に諮ったときの議論は、なかなか象徴的だった。まず、作家を経済学の専門コースを動かすカリキュラムのなかに入れることに、強い抵抗があった。経済学教育と一体何の関係があるのかといった実に偏狭な学問観が、何の恥じらいもなくたたきつけられる。経済学、いや社会科学研究者としての想像力をまったく欠如した、研究対象に自らを売り渡したような議論がゆきかった。曲がりなりにも、わが国における経済学研究をリードする大学の研究者のもつ知性の底の浅さ、それどころか研究者自らが創りだしてしまった「大学における知」のゆきどころのない閉鎖性があからさまになった。小田さんを迎える大学とは、せいぜいこんな程度だった。

ある打ち合わせの席で、小田さん曰く、

「東京へ来る新幹線に早朝乗ってみい。すごいで。同じようなスーツの人間ばかりやで。」

これは、まさしく本書でも取り上げられている法人資本主義の一面である。小田さんが、この言葉で表そうとしたことは実に根が深い。経済学者が機能論的に分析する法人資本主義論とはひと味もふた味もちがう。まず、新幹線の車内に入ったときの小田さんの驚きとともに、彼らのなかに「会社人間」を、いいかえれば、個人を超越した別の「……人間」を鋭く見通している。まさに新幹線は小田さんにとって現場であり、思想の現場と化している。同じように大学もまた、ダークグレーのスーツこそ身につけていないとはいえ、「……人間」の蝟集する場になりさがっている。まさしく正真正銘、思想の現場なのである。しかも新幹線のように移動して止まない現場なのである。

小田さんにまとまった大学論があるわけではない。むしろ大学をまともに論じないところに小田さんの特徴があるといってもよいほどだが、一連の「現代思想」講座のなかでは、しばしば大学について言及している。小田さんは、ある時期、ニューヨーク州立大学の教授として日本文学を講じた経験をもっている。このときのことを小田さんはつぎのように述べている。

「私はニューヨーク州立大学で二年間教えた。日本学科創設のために『ニューヨーク州立大学友の会』をつくって、募金をはじめた。その時気がついたけど、百ドルでも税金控除の対象なんです。税金払う代わりに、たとえばＮＧＯに寄付したらいい。この運動の方が有意義だと思ったらそこへ寄付する。そういうシステムを作るのが近代国家でしょう。」（飯田裕康・高草木光一編『小田実の世直し大学』筑摩書房、二〇〇一年、二〇二頁）

一見、変哲もないことを述べているようでありながら、ここでいわれていることは実に重い。アメ

リカの大学が理想的であるか否かはともかくとして、小田さんには、あるべき大学のイメージは明確なのだ。このニューヨーク州立大学でのできごとは、小田さんに市民の大学という課題、いいかえると市民の「学び」の場とは、という課題を与えたのではなかろうか。小田さんが理想とする大学は、国立大学でも私立大学でもなく、いうなれば市民立大学である。市民がつくり育てるシステムをもった大学である。近代日本の高等教育は、このような企てに一顧も与えずに今日にいたっている。旧帝国大学からはじまって、高等教育にたいする国家「統制」は、ごく最近まで衰えることはなかった。とりわけ私立大学にたいする諸種の、特に資金面での規制は、私大への国家管理ともいうべき方向性をいやでも強める傾向にあった。私学助成は、私大経営の経常費にまで及び、私大教員は、「三分の一公務員」などと揶揄されるまでになった。周知のように、構造改革という名のもとに、高等教育に関しても大幅な規制緩和がなされた。国立大学は、独立行政法人として組織替えされた。二〇一〇年には、一八歳人口の減少で大学入学志願者数が大学入学定員を下回るという状況にあるにもかかわらず、大学設置認可の基準が緩和されたため、つぎつぎと新手の大学が立ち上げられている。高等教育の質を如何に維持し高めてゆくかといった論点は、大学設置の勢いの前にかすんでしまっているのが現状であろう。少なからぬ大学が、いかに入学定員を満たすかに苦悩している。

このような情況を踏まえ、つぎの小田さんの発言を反芻してみたい。これはボランティアとしての学生の市民的活動も有意義だという筆者の言をとらえての発言である。

「それはそうですよ。そこに学問の価値があると思うんですね。しかし、裏の側面を見れば、いまの若者は政治的であることを恐れているんですよ。ボランティア活動でも政治的でないからや

るんだという意識がどこかにある。大学の先生もそうなっているかもしれません。

しかし、本来われわれは政治的に生きてるんです。市民社会のポリス的動物ですから。ポリスというのは市民国家です。そうならそんなこと恐れることないんじゃない。西欧社会は政治を恐れてないでしょう。日本はなんだかタブーになっちゃったわけよ。政治が左翼であるなんて限らないじゃないの、右翼が政治やっとるんだからね。だからそれをあまり恐れないで、大学が政策を提言することもあっていい。

大学の存在自体がまるごと『政治的』ですよ。市民社会の根幹にいるんだからね。政府の『政治』でもないし、左翼政党の『政治』でもない。市民の『政治』という理念をはっきり打ち出すのも大学の一つの役割ではないかと私は思いますね。」（前掲書、六七頁）

「市民社会の根幹にいる」大学、これこそ小田さんの理想とする大学かもしれない。そしてそれは、ポリスのポリスたる所以、すなわち政治によって市民社会のなかにしっかりとした関係性を保持することができるとの確信に支えられる。「小田さんのいる大学」に彼自身その可能性の一端を見定めていたのかもしれない。

小田さんの話のなかに、「する側とされる側」という議論の枠組みがよく登場する。小田さんの思想を語るとき無視しえない論理なのだが、その際、小田さんは『ニューヨーク・タイムズ』紙の写真を示すことが多い。写真は、黒煙に覆われた大阪市の一部で、終戦直前一九四五年六月一日の大阪空襲の様子を、上空のB29から撮影したものだ。まさにされる側として小田さんは、この黒煙の下、死

の恐怖の修羅場にいた。小田さんの戦争体験の証拠でもある。そして紛れもなく、小田さんの現場の思想の原点でもある。小田さんがこのときどんな恐怖をいだいたのかは、同年三月一〇日の盛岡市の空襲を疎開先にいて体験した筆者にもよくわかる。あの轟音と色彩には、まるで何か未知の巨大なものに押しつぶされるような怖さがあった。

写真の黒煙に覆われる地上に何があったかは、上空からは見えない。広大な地域を爆撃し、戦果があがったというだけだ。しかし、地上はまったく違う。あるものは一瞬にして死を迎え、異様な臭気のなかであるものは傷にうめき、あるものはただ泣きじゃくり、あるものは恐怖に声も立てられず、ただふるえているだけだ。二、三千メートル上空と地上とでは、同じ現場は共有できないのだという強烈なメッセージが、あの一葉の写真に含まれている。どちらの現場を選ぶかではない、否応なしに地上という現場に立たされたとき、一体何が見えてくるのか。あきらかにあの写真に撮られた世界とは画然とちがう。このちがいの認識こそ小田さんの思考の原点と言っていいだろう。

小田さんは、つねに地上にしっかり居処を定めようとする。これがあって、市民運動家小田実はあった。先にも触れたように大所高所にたった、実際には見えていないものをあたかも見透しているが如きレトリックで、人を強引に動かそうとはしない。空を覆う黒煙しか見えないものよりも黒煙の下で呻吟する自分の周囲を見て、はじめて現場は自分のものとなる。これが小田さんの方法論だろう。大きな網を投げて一網打尽にするよりも、自分の網の目を一目ずつ広げていって、いつしかそれが大きな網になっている。これは、まさしく現代的思考を逆転しようとするものだ。だが、小田さんのポリス的知性から見れば、ごく当たり前の方法であるに違いない。いや、あたりまえの方法どころか市民

社会というのはそうしたものなのだ、と小田さんは確信している。

本書のなかでは、さほど明らかには述べられていないが、小田さんは、「空飛ぶ鳥の目で眺めるより、地を這う虫の目で見る」ということをいわれる。

「虫は上を見たらいいんです、全宇宙を。完全に自由です。」

こう小田さんは近著『中流の復興』（生活人新書、日本放送出版協会、二〇〇七年、八四頁）で書いている。爆撃する側よりされる側の方が、まさしく自由なのだというこの言説は、なんと含蓄に富んだいい方だろう。

本書の元は先にもあきらかにしておいたように、大学での半期の講座であるが、小田さんをはじめ参加者たちの虫の目によってとらえられたことがらを織りあわせながら、思想の現場を一つ一つ組み合わせ、世界を広げてゆこうとすることに主眼が置かれたといってよい。例えば、生命倫理が取り上げられるとき、小田さんは遺伝子操作に伴う特許の問題を論じながら、議論の次の段階への自由度を大事にして、生命倫理とはこういうものといった考えをまったくあきらかにされなかった。そのおかげで、というと大げさだが、議論の網の目はつぎつぎと広がり、ついには教室を超えることにもなり、そこでは、参加者一人ひとりが自らの職能（役割）を踏まえた論点の交換という形を取った、交換という限りでは相手の存在にたいする自覚にもとづいた、まさしく自由で、全宇宙的広がりにつうじる関係性が紡ぎだされることにもなった。筆者はここに、今日的な大学の知のありようを超えた新たな知への着実な歩みの起点があるように思う。それのみならず、市民の大学としての大学のありようを模索する可能性も示されていたといいたい。

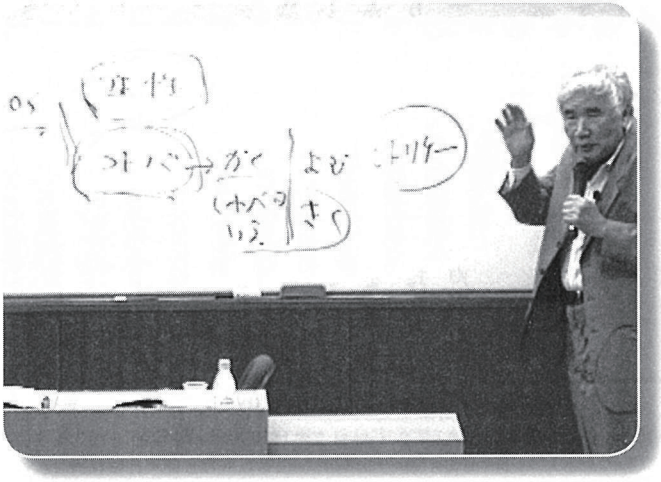
「小田さんのいる大学」とはなんだったのか。ふたたび、あの教室での緊張感を思い起こすとき、実はその緊張感、これには、恐怖や憤り、あるいは敬意などが含まれるのだが、これこそ、まともな対話（discourse）すなわち意見交換をするための最低の条件でもあるということを発見することだったのだろう。

いま小田さんとの「現代思想」講座をふり返って思うのは、大学という場において、われわれは市民たりえていたか、市民たりうるのかとの厳しい問いかけなのだ。この問いに答える道筋のなんたるかを、生前の小田さんに示しえなかったことは、まことに残念至極というほかはない。本書を編むということが、その答えを見出すための小さいながらも大事な踏み石なのだと確信していることを、冥界の小田さんにお伝えしたい。

生きる術としての哲学

——小田実　最後の講義

I　世界をどう捉えるか



はじめに

それではこれから一緒に考える講座を開きたいと思います。考えるひとつの土台、あるいは材料を皆さんに提供しようと思います。

世界はいまたいへんなところに来ているでしょう。大きな一枚の絵を描いて、それで万事うまく行くような時代ではなくなった。さまざまな要素が複雑怪奇に絡まっている。「日朝会談」ひとつ見てもそうです。日朝会談、日朝対話そのものは評価できても、「拉致疑惑」が「拉致」になって、しかもたくさんの人が、おそらく若くして殺されていることがわかった。総合的にどう評価したらいいのか。世論調査を見ても、「対話ができた」ことには八〇%くらいの支持があり、小泉（1）内閣〔当時〕の支持率も上がっている。しかし、同じ世論調査で、「拉致事件」に対する強烈な怒りの声が上がっている（2）。

去年〔二〇〇一年〕九月一一日に「同時多発テロ」があった。それからおそらく世界が一変しつつある。アメリカは、その後アフガニスタンと戦争をした。そして今度は「イラクを攻撃する」とブッシュ（3）は言っている。自由の問題、戦争と平和の問題が、新たな局面を迎えていると言っていいと思う。そして、今年〔二〇〇二年〕は、「日朝会談」があった。

この講座では、そうした問題すべてをトータルに考えたい。すべてはできないか

《註》（下線は、底本に追加した箇所を示す。没年、退任年など）

1　小泉純一郎（1942- ）。内閣総理大臣（2001-06）。

2　朝日新聞の世論調査（2002年9月18日実施）によれば，小泉内閣の支持率は，前回（2002年8月31日・9月1日）の51%から61%に上昇した。日朝首脳会談に対する評価は，「評価する」が37%，「どちらかといえば評価する」が44%，合計81%である。「日本人の拉致問題をめぐる北朝鮮側の対応」については，「納得できる」が15%，「納得できない」が76%だった（『朝日新聞』2002年9月20日）。

もしれないけれども、私が重要と考えたテーマについては、私の見解を話します。一緒に考えてもらいたい。

一　二つの「哲学」

今年の三月から四月にかけて、私はギリシアに出かけて、アテネ国立大学で講義をしてきました。講義の依頼は二つありました。ひとつは「日本文学」についてです。日本文学と言っても、私は『源氏物語』や花鳥風月の類の話は一切しない。そういう話は、ほかに書いている人がたくさんいる。私が話したのは「原爆文学」です。原爆は日本に落とされて、ひとつの文学を形成しています。私も『HIROSHIMA』（4）という小説を書いているし、林京子（5）や、何人もが書いています。講義には多くのギリシアの学生が来てくれました。

もうひとつ依頼された講義のテーマは、「哲学」でした。ギリシアは言うまでもなく哲学の本場です。「哲学」、《philosophy》ということばは、もともとはギリシア語です。《philein》は「愛する」ということ、「キスする」という意味もある。《sophia》は「知恵」。「知恵を愛する」ことです。これを、明治時代に「哲学」というヘンテコなことばにでっち上げたわけです。

アメリカの大学では、一年生を《freshman》と言います。二年生のことをどう言うか？　二年生は《sophomore》と言う。ギリシア語の《sophos》は「賢い」、

3　George Walker Bush（1946- ）。アメリカ合衆国第 43 代大統領（2001-09）。
4　小田実『HIROSHIMA』講談社，1981 年，講談社文芸文庫，1997 年。
5　林京子（1930- ）。長崎市出身の作家。『林京子全集』（編集委員：井上ひさし，河野多恵子，黒古一夫）全 8 巻，日本図書センター，2005 年。

《moros》は「バカ」ですが、この二つを合わせたことばだから、「賢バカ」ということになります。二年生になると知識を鼻にかけて「賢バカ」になる。

アテネ国立大学は、言わば哲学の発祥の地です。そこの哲学科で何を講義するのかと聞いたら、「日本におけるギリシア哲学の受容」について話してくれと言う。誰がどの哲学者を翻訳したとか、そんな類の話はどうでもいい。ただ、ギリシア哲学が日本に導入されたときに実は重大な問題を起こしている。その話をしました。

哲学には二つある。一つは、皆さんが理解しているとおり、ものごとが何で成立しているのか、何でこんなものがあるのか、分析したり認識したりする学問です。《Philosophy in Thought》、「思考のなかの哲学」です。プラトン（6）のイデア（7）説がどうのこうのという哲学史の講義を受けて、あくびが出た経験があるだろう。しかし、それは、フィロソフィーの一つのジャンルにすぎない。半分しか理解したことにならない。もう一つ重要な哲学があります。《Philosophy in Action》、「行動のなかの哲学」です。古代ギリシア哲学においてはこの二つがあった。それを日本は受け入れていない。

古代アテナイは民主主義の本場です。《democracy》は、もともとギリシア語で、《demos》と《kratia》の合成語です。《demos》は「民衆」の意味ですが、もう一つ、「選挙区」「居住区」、「地域」、つまり「住民」の意味もあります。《kratia》は「力」です。つまり「民衆の力」が「デモクラシー」ということになります。「デモクラシー」

6　Platon（BC427?-BC347）。古代ギリシアの哲学者。ソクラテスの弟子。
7　個別の事物の背後に実在する本質。

は、本来選挙とは関係ありません。選挙はローマ時代に始まったもので、ギリシアでは、あまり選挙をしていない。ローマは民主主義ではなく、共和制の名前を借りた独裁国家です。そこから堕落が始まる。それに対して「デモス・クラティア」、「民衆の力」を誇ったのが古代アテナイで、紀元前五世紀にはペリクレス（8）をはじめ多くの論者がいて、文学も隆盛した。

古代アテナイの「デモクラティア」は、一言で言えば、「民衆が力をもって民衆が政治をする」ということです。大衆が政治をする。政治はものを考えなければいけないから、そこから哲学が生まれる。それが《Philosophy in Action》になります。

皆さんは、哲学用語で《logos》を知っていると思います。これは、「理性」という意味と「ことば」という意味の二つがあります。「理性」と「ことば」の二つが人間の思考活動を形成するわけですが、明治時代の人は「思弁」というう まい訳語をつくった。ちゃんと「弁」がなかに入っています。哲学は「理性」の話ばかりで、「ことば」の話をしていない。

実際の「デモクラティア」の政治は、ことばを中心にして行われます。民主主義の根本はことばでしょう。ことばで説得することによって成り立つ政治が、民主主義です。カネや力を持ってくるのは民主主義ではない。

わけのわからないことを言っても、もちろん人はついてこない。ことばによって、人を「説得」しなければいけない。脅しではなく、相手を納得させ、その気にさせる。

8　Perikles（BC495?-BC429）。古代アテナイの政治家。

そこから「理性」が出てくる。だから、《logos》は、もともと「ことば」で、次に「理性」という意味が派生したことになります。

ギリシアでは、「書く」の前に「しゃべる」があり、「読む」の前に「聞く」がありました。英語の《audience》は、「聴衆」という意味と「読者」という意味と二つありますが、もとの意味は「聴く人」です。後になってから「読者」という意味が出てきたわけです。古代アテナイには、字が読めない人は山といましたが、政治に参加していると、字が読めなくても理性をもってきます。だから、哲学のもとは、まず「しゃべる」ことです。よく言われることですが、ソクラテス（9）は市場へ行って靴屋としゃべって自分の哲学を形成した。しゃべることが、哲学の根幹にあるわけです。

しゃべることによってものごとを達成する、ことばで説得することによってデモクラティアを進行する。そういう思考のもとが、彼らの考えるフィロソフィアです。

どうしゃべり、どう人を説得するか。それが、《rhetorike》、つまり「修辞学」です。日本では、「単なる修辞にすぎない」といった表現があるように、「修辞」は大切にはされませんが、《rhetoric》、ギリシア語で言うと《rhetorike》は非常に大事な学問として成立しています。アリストテレス（10）に『レトリケー』（11）という本があります。まさに、どうしゃべるか、どう人を説得するか、法廷の弁論、議会の弁論について書いてある本です。日本の大学では、アリストテレスの分析学の話は

9　Sokrates（BC469?-BC399）。古代アテナイの哲学者。
10　Aristoteles（BC384-BC322）。古代ギリシアの哲学者。プラトンの弟子。
11　アリストテレス（戸塚七郎訳）『弁論術』岩波文庫，1992 年。

しても、修辞学の話は誰もしない。そもそも、日本の大学には哲学科はあっても、修辞学科は、この慶應大学も含めてどこにもないでしょう。

「明治革命」――私は「明治維新」と呼ばない、「明治革命」と呼ぶ。当時の第三世界の革命だから、いちばん似ているのはナセル（12）の「エジプト革命」（13）です――その「明治革命」以後、日本は、西洋を取り入れました。しかし、そのときに取捨選択をしています。日本がもし植民地だったら取捨選択はできません。宗主国のものをすべてそのまま受け入れるほかはない。ベトナムはフランスをそのまま受け入れ、インドはイギリスをそのまま受け入れた。日本は独立国だから、必要なものと必要でないものを分けた。取捨選択をした。

たとえば、一八七一（明治四）年、岩倉具視（14）を団長にして、使節団がアメリカ、ヨーロッパに派遣されます。その報告書が『米欧回覧実記』（15）で、これは実におもしろい。政府のトップから留学生までいろいろな人物を連れて行って、これはいい、あれはだめだ、と議論している。アメリカは民主主義だから、その政治を取り入れなかった。イギリスは議会制民主主義の国だから、フランスはフランス革命の国だから、その政治を取り入れなかった。取ったのはプロシアで、憲法までちょっと真似をしてつくった。ただし、「鉄血宰相」のビスマルク（16）は取っても、「社会保障」のビスマルクは取っていない。世界最初の社会保障国家を曲がりなりにも実現したのはビスマルクのドイツ（17）ですが、「社会保障」については基本的に

12　Gamal Abdel Nasser（1918-70）。エジプト・アラブ共和国第２代大統領（1954-70）。
13　エジプト革命。1952 年，自由将校がクーデタを起こし，1953 年共和制宣言。
14　岩倉具視（1825-83）。第２代外務卿（1871）。
15　久米邦武編（田中彰校注）『特命全権大使米欧回覧実記』全５巻，岩波書店，1985 年，岩波文庫，1996 年。
16　Otto Eduard Leopold von Bismark（1815-98）。プロイセン王国首相（1862-90）。1871 年から 1890 年までドイツ帝国初代宰相を兼務。

捨てました。日本の近代は、こうやって、西洋のなかの自分に都合のいいものだけをとって始まったわけです。

西洋の哲学を受け入れるときに、分析学としての哲学だけを取って、修辞学や、そういう系統の《Philosophy in Action》は捨てた。明治の歴史を調べてみると、その様子がわかります。では、なぜ修辞学は必要ないのか。これは、なかなかおもしろい問題で、論文のテーマにもなると思います。ひとつには、堕落していたことが挙げられます。形骸化して、教会のなかの問答のようなものに堕落していたことは事実です。しかし、もっと根本的な理由があります。修辞学や《Philosophy in Action》には、民主主義が張りついている、ということです。

「ことば」は、デモクラシーと結びついています。日本は近代国家をつくりますが、民主主義国家はつくっていないし、目指してもいない。大衆に演説ばかりされたら困る。明治の元勲たちは、統治について考えをめぐらしたうえで取捨選択をしているわけです。

だから、いまでも日本では「哲学」というと、カント（18）やヘーゲル（19）の話ばかりになってしまう。その意味では、日本は非常に特殊な国です。たとえば、英米にはプラグマティズムが発達しています。アテネ大学の哲学の先生も、「小田さんの話を聞いて、日本人の哲学の先生のことが、よくわかった」と言っていました。「しゃべる」、「聞く」から始まって、「思考」を固めていった西洋社会のあり方、

17　ビスマルクは，社会主義運動に対して厳しい措置をとる一方，災害保険，疾病保険，養老保険などの各種社会保障制度を整えた。

18　Immanuel Kant（1724-1804）。ドイツの哲学者。『純粋理性批判』（1781）。『実践理性批判』（1788）。『判断力批判』（1790）。『永久平和のために』（1795）。『カント全集』全 23 冊，岩波書店，1999-2006 年。全 18 冊，理想社，1966-77 年。

19　Georg Wilhelm Friedrich Hegel（1770-1831）。ドイツの哲学者。『精神現象学』（1807）。『大論理学』（↖）

《Philosophy in Action》を受け入れなかった日本社会のあり方を考え直すときに来ている、と思います。

二　いま何が問題か

私がこの講座でやりたいことは、分析や認識の学問ではなく、実際の現場のなかでどう生きるか、現場でどうものを考えるのかです。だから、《Philosophy in Action》、《Thought in Action》、つまり「行動のなかの哲学、思考」を基本的な問題として提起します。《Thought in Thought》、「思想のための思想」や「考えるための考え」では意味がない。そのために、この講座では、実際に現場で考えている人を呼んでくるという提案をしてきました。もちろん、単に流行りの有名人を呼んでくるということではありません。

昨年度〔二〇〇一年度〕の「現代思想」がどのようなものだったのか、簡単に振り返ってみましょう。

私は、今、慶応義塾大学経済学部で「現代思想」を講じている。

「現代思想」を講じていると言っても、よくあるように、ハイデガー（20）がどうしたか、フーコー（21）が何を考えたかのたぐいを学生に教えることをやっているのではない。私が「介ぞえ役」の飯田裕康、高草木光一の二教授とども

(1812-16)。『エンチクロペディ』(1817-30)。『法哲学』(1821)。『ヘーゲル全集』全20巻32冊，岩波書店，1931-2001。

20　Martin Heidegger（1889-1976）。ドイツの哲学者。『存在と時間』(1927)。

21　Michel Foucault（1926-84）。フランスの哲学者。『言葉と物』(1966)。

に九月以来毎週金曜日のこの講座でしてきたことは、人生、社会の現場でさまざまな問題に対し、ぶつかり、そこで格闘することを通して、自らの現場の「現代思想」をかたちづくって来た「現場の思想家」を招いてその思想形成を語ってもらい、私がそれを受けて私自身の思想を展開し、学生たちも自由に質問し、意見を述べて自らの思想をかたちづくる――これが私たちの「現代思想」の講座だ。（講座のこうした基本構想の子細は、二教授が私と語ってつくった「飯田裕康、高草木光一編・小田実の世直し大学」（筑摩書房）のなかにある。一読されるとよい。）

誤解のないように述べておきたいが、この講座は、よくあるように、現場の人を招いて体験を語ってもらっているのではない。現場の人の「現代思想」をその人自身によって論じてもらっている。五人の「現場の思想家」にこれまで来てもらったが、皮切りは「西欧化」「近代化」の問題を彼自身の創作活動のなかで追求してきた韓国の作家 黄哲暎（ファンソギョン）（22）氏、五人のしんがりはついぞ先日の志位和夫（23）氏。志位氏は日本共産党の委員長だが、私たちは彼に共産党の政策を述べてもらうつもりで招いたのではなかった。今、市民と議会制民主主義の乖離はあまりにもひどいが、この問題をどう解決するか――の思想的課題について「現場の思想家」として論じることを頼み、彼もその求めにこたえていい講義をした。

22　黄哲暎（1943- ）。韓国の作家。2001 年度「現代思想」のゲスト・スピーカーの一人。飯田裕康・高草木光一編『ここで跳べ――対論「現代思想」』慶應義塾大学出版会，2003 年，26-45 頁。

23　志位和夫（1954- ）。衆議院議員（1993- ）。日本共産党委員長（2000- ）。2001 年度「現代思想」のゲスト・スピーカーの一人。飯田裕康・高草木光一編『ここで跳べ』206-233 頁。

今は全世界にわたって、現実の事態の大混迷とともに思想的にも大混乱の時代だ。これまでに常識としてあった論理、倫理がゆらぎ、根底から覆されようとさえしている。その問題が今もっとも鋭い、そして、重いかたちで出てきているのが、「同時多発テロ」とそれに対する「報復戦争」という戦争、暴力の問題でもあれば、臓器移植、遺伝子操作などから始まる「生命科学」の領域であるにちがいない。後者の「生命科学」にかかわって、私たちは臓器移植拒否から始まって遺伝子操作、生殖細胞加工、ヒトクローン胚の作製、製造に明確に反対する思想的立場をとる脳外科医の山口研一郎（24）氏を「現場の思想家」として招き、この問題を論じてもらったのだが、学生たちが、ある意味でもっとも鋭く、そして重く反応を示したのが、この「生命科学」にかかわっての山口氏の講義だった（25）。

山口研一郎氏の見解に賛成するか反対するか、それ自体が問題ではありません。山口氏の提示した問題を自分で考えることがこの講座の眼目です。考えるための種子を提供するから、一緒に考えようという趣旨です。

去年の九月以来、世界は急速に変わってきています。われわれは否が応でも、この時代の問題に直面せざるをえない。

たとえば、アメリカがイラクに攻撃をかけた場合、タテマエとしてきた「文明」

24　山口研一郎（1949- ）。脳神経外科医。現代医療を考える会代表。次の註 25 を参照。

25　小田実「『現代思想』大混乱の時代『生命科学』の特許公開を（西雷東騒）」『毎日新聞』2001 年 12 月 18 日。小田実『西雷東騒――思索と発言 2』岩波書店，2005 年，83-85 頁。山口研一郎氏は，「現代思想」の講義（2001 年 11 月 2 日）「脳死・臓器移植拒否宣言」において，現代医療・医学の問題点を鋭く指摘した。次の週の講義（2001 年 11 月 9 日）では，本書の編者である飯田裕康と高草木光一が，山口氏の講義に対する参加者のアンケート結果を分析しながら，問題点を整理し直した。その翌週（2001 年

次頁へ

の構造は崩れます。「眼には眼を、歯には歯を」という論理でテロリストに向かえば、テロリストと同じになってしまいます。しかも、アルカイダとイラクの関係は、何もわかっていない。この間発表されたブッシュ大統領の「安全保障戦略」(26)を読みますと、「何が何でもやっつける」という意志が強く出ています。われわれは、歴史的瞬間を生きている、と言ってもいいだろうと思います。

私が毎月『毎日新聞』に書いているもの(27)のなかで、皆さんの思考の土台になると思うものをピックアップしてみました。

「私にとっての八月一四日」(28)は、私の思想的原点について書いてあります。八月一五日ではなくて八月一四日です。一九四五年八月一四日に大阪大空襲がありました。私はその現場にいた。敗戦の一日前ですから、敗戦は既に決まっていた。決まっていたにもかかわらず、爆撃を受けた。私はそこで死んでいたかもしれない。「なぜ爆撃を受けたのか」がそこに書いてある。日本も、アメリカも国家は怖い。これは肝に銘じておいたほうがいい。

「『任期一期』の政権の賭け」(29)は、ブッシュ政権について書いたものです。皆さんが知っているとおり、ブッシュは、ゴア(30)と接戦のうえ、実際にはどちらが勝ったかわからない状態で大統領になった(31)。ブッシュが大統領に就いたとき、日本のアメリカ通とされる人たち、日本のジャーナリストたちはほとんど全員、「一期目は政権不安定だから、一期目はおとなしくしていて二期目からやりたいことを

11月16日)は,小田実が「先端医療と生命倫理」と題する講義を行い,最後に,「生命科学に関するものは特許をとらない」という条件をつけることで生命科学の発展をコントロールすることを提案した。2001年度の最後の講義(2002年1月18日)では,この「生命科学の特許」の問題をめぐって,小田,山口,飯田,高草木の4名でシンポジウムを行った。以上については,飯田裕康・高草木光一編『ここで跳べ』に収録されている。

26 The National Security Strategy of the United States of America, The White House, September

やるだろう」と書いていました。私の見解は違います。アメリカ合州国の政治を見ますと、一期目にやらなければ二期目につなげない。一期目が危うい状態であれば、なおさら勝負に出るだろう、と私は書いた。パウエル（32）やアーミテージ（33）のことも書いた。アーミテージに私は会ったことがありますが、最初から相当なことをしかけてくるだろうと思います。日本のジャーナリストたちは、アメリカという国を全然わかっていない。

去年この「現代思想」の講座を開講する直前に起こった「九月一一日」について、私は「日本の市民として考える」（34）を書きました。ニューヨークのビルディングに飛行機をぶつける「同時多発テロ」を、他の人たちはみな「異様なこと」として書いていましたが、私は違う。「日本の市民として考える」のは、これは日本人がやったことじゃないか、ということです。かつて、日本は「神風攻撃」をしかけ、パール・ハーバーを「奇襲攻撃」した。ひたすら自分たちの「正義」を信じてそうした攻撃を行い、われわれは負けた。そして、自分たちが間違っていたと感じたからこそ、「平和憲法」を考えた。そういう趣旨で書いています。九月一一日の夜、新聞社から電話で依頼があって、徹夜で書きました。

「『同盟国』日本が今文明から求められていること」（35）は、九月一一日から少し時間が経った時点で書いています。アメリカにくっついて行くことはない、と書いています。

2002.「必要に迫られれば先制攻撃で自国を防衛する権利を行使するために，単独行動もためらわない」とした。「『ブッシュ・ドクトリン』圧倒的軍事力を堅持　米，新戦略を発表」『朝日新聞』2002年9月21日。

27　小田実が『毎日新聞』東京版に月1回掲載していた「西雷東騒」。1999年7月27日に始まり，2006年3月28日で終了した。小田実『西雷東騒――思索と発言2』（岩波書店，2005年）に収録されている。

28　小田実「私にとっての八月一四日（西雷東騒）」『毎日新聞』1999年7月27日。『西雷東騒』3-5頁。

「小国の視点」（36）は、ギリシアの話として書きましたが、いま「大国」の視点ばかりで「小国の視点」が欠けていると思う。「される側」の小国の視点です。私はギリシアへ行ってギリシア哲学について講義したあとで、ギリシアの現実を見てきた。それがこの「小国の視点」です。私は、古典の世界と現実の世界をいつも結びつけて考えている。

次に、「アメリカ合州国という名の『関東軍』」（37）です。知ってのとおり、関東軍は勝手に戦乱を広げて、日本政府はそれを追認した。同じようにアメリカという関東軍は勝手に戦争をしかけ、日本はそれを追認している、ということを書いた。「アテナイとアメリカ合州国・その酷似」（38）では、いまアメリカ合州国がやっていることは、古代アテナイ帝国と同じく民主主義の名前を借りた暴挙だという趣旨で書きました。そのアテナイはやがて崩壊して、ローマが勃興しますが、いまはそういう過渡期だと思う。アメリカ合州国がイラクを攻撃して何が起こるかと言えば、二一世紀まで文明が構築してきたものがつぶれていく。自分だけが何でもできると言って勝手なことをやりだしてから、アテナイ帝国もローマ帝国も滅亡への道を歩んだ。

「今、この世界の中で、あらためてベトナム戦争を考える」（39）は、ベトナム戦争でなぜアメリカが負け、ベトナムが勝ったのか、を問題にしています。アメリカは自分たちが負けた原因をまったく反省せずに、また同じ誤りを繰り返そうとして

29　小田実「『任期一期』の政権の賭け（西雷東騒）」『毎日新聞』2001 年 3 月 27 日。『西雷東騒』60-62 頁。

30　Albert Arnold "Al" Gore（1948- ）。アメリカ合衆国の政治家。ビル・クリントン（William Jefferson "Bill" Clinton，1946- ）政権の副大統領。

31　2003 年 11 月 7 日に本選挙が行われたアメリカ大統領選挙で共和党のブッシュが民主党のゴアに僅差で勝ったものの，とくにフロリダ州において投票用紙の不備等による疑惑が指摘され，連邦最高裁判所の判断による「政治的」な決着となった。

います。

「歯止めが崩れかかって来ている」（40）では、戦後世界のなかであった二つの歯止めを議論しています。一つは、「ナチス・ドイツ」の強制収容所やアウシュビッツはもう繰り返してはならない、という共通の認識です。これが歯止めになっていた。ところがいまそれが音を立てて崩れているでしょう。「ナチス・ドイツ」にやられた側のイスラエルが、パレスチナに殺戮攻撃をする。アメリカは、疑わしい連中を根こそぎ攻撃しようとしている。アメリカがイラクにまで攻撃をしかければ、いっそうはっきりしますが、ナチスと同じようなことが繰り返されることになります。もう一つの歯止めは日本です。たとえば、福田官房長官（41）〔当時〕は、政府高官の意見と称して「非核三原則」の見直しはよろしいと言い出した。日本の錦の御旗は「ヒロシマ」「ナガサキ」でしょう。日本が世界に発言権をもっているのは、金持ち国だからではなくて、「ヒロシマ」「ナガサキ」の被爆体験があるからでしょう。原爆の被害を繰り返してはならないという歯止めが崩れかかっています。

最後に、「もと『フルブライト留学生』として今アメリカを考える」（42）。私はフルブライト留学生でした。一九五八年から五九年まで、私はアメリカ合州国のハーバード大学に留学しました。フルブライト奨学金のお蔭です。この制度がなければ、アメリカに行くチャンスはなかった。フルブライト（43）という政治家は、「世界が平和になるために若者を招く」という理想を掲げた。理想を掲げた留学制度は

32　Colin Luther Powell（1937- ）。アメリカ合衆国の政治家。元軍人。レーガン（Ronald Wilson Reagan，1911-2004）政権で国家安全保障担当大統領補佐官（1987-89），ジョージ H. W. ブッシュ（George Herbert Walker Bush, 1924-）政権では，統合参謀本部議長（1989-93）として湾岸戦争を指揮した。ジョージ・ウォーカー・ブッシュ政権で国務長官（2000-05）。

33　Richard Lee Armitage（1945- ）。アメリカ合衆国の政治家。軍人。レーガン政権で国防次官補代理，国防次官補。ジョージ・ウォーカー・ブッシュ政権で国務副長官（2000-04）。

世界にこれだけしかない。そのフルブライトの理想をいかにアメリカ自身が踏みにじっているか。

いまの日本について、中山千夏（44）さんが「私がニュースを嫌悪する理由」（45）を書いています。そのなかでおもしろいと思ったのは、「右傾化」のことです。

ニュースに対する嫌悪の最大のものは、私の政治的信条に深くかかわっている。

国旗・日の丸、国歌・君が代の制定反対。

自衛隊は違憲。

天皇はいらない。

非軍備・交戦権放棄の憲法第九条を支持する。

三十年前、これらはさほど偏った意見ではなかった。むしろ主流だったとさえ言える。私はそういうものとして、これらの意見を身につけた。その後、思えば思うほど納得できるものとして、これらの意見を保持してきた。ところが十年二十年と経るうちに、これらは極左の意見になってしまった。私が左へ行ったのではない。私は進歩もなく同じところに立っているのに、世の中が右へ寄ってしまったのだ。

34　小田実「日本の市民として考える」『朝日新聞』2001 年 9 月 13 日。小田実『市民の文（ロゴス）――思索と発言 1 』岩波書店，2005 年，25-26 頁。

35　小田実「『同盟国』日本が今文明から求められていること（西雷東騒）」『毎日新聞』2001 年 9 月 18 日。『西雷東騒』75-77 頁。

36　小田実「小国の視点（西雷東騒）」『毎日新聞』2002 年 4 月 30 日。『西雷東騒』94-96 頁。

37　小田実「アメリカ合州国という名の『関東軍』（西雷東騒）」『毎日新聞』2002 年 5 月 28 日。『西雷東騒』

三〇年前には、賛成か反対かは別として、天皇制の是非についてみんなが論じていた。いまでは、議論することもできなくなっています。

三　現場の思想

いま世界は混沌としていて、これからどうなるかわからない。ということは、われわれの世界は「現場」だということです。「現場」は「場」とは違う。たとえば、「恋愛の現場」とは言わない。しかし、「不倫の現場」とは言うだろう。「現場」は波風が立つ場所だ。「散歩の現場」とは言わないけれども、散歩している途中で襲われたら、そこが「現場」となる。何かが起こると、「場」は途端に「現場」になる。いまは世界中が「現場」だと言ってもいい。いろいろなことが次から次に起こっている。原子力発電所は、ひび割れを隠していた（46）。スーパーマーケットでは、食肉の産地をごまかしていた。何を信じたらいいのか。新聞を見れば、毎日「現場」だらけだ。スーパーマーケットまでが「現場」だ。いま、われわれはそういう時代に生きています。

「社会主義」の理想は費えて、次々に世界から消えていった。それならば資本主義がいいのかと言えば、金儲けに狂奔して方向を見失っている。いま、政治や経済のシステムそのものが立て直しのときに来ている。ということは、やはり「現場」だ。「現場」では、自分で決めなければいけない。判断しなければいけない。「恋愛の場」

97-99 頁。

38　小田実「アテナイとアメリカ合州国・その酷似（西雷東騒）」『毎日新聞』2002 年 2 月 26 日。『西雷東騒』89-91 頁。

39　小田実「今，この世界の中で，あらためてベトナム戦争を考える（西雷東騒）」『毎日新聞』2002 年 3 月 27 日。『西雷東騒』91-94 頁。

40　小田実「歯止めが崩れかかって来ている（西雷東騒）」『毎日新聞』2002 年 6 月 25 日。『西雷東騒』

が「不倫の現場」になった途端に、あらゆる問題が噴出してくる。たとえば、「恋愛の自由」という価値観と「家族の絆」という価値観が衝突する。そのまま放っておくことは許されない。自分で基準をつくって決めなければならない。知識を集めて自分自身で判断するときに、《Philosophy in Thought》では役に立たない。議論しあいながら形成する《Philosophy in Action》が、必要になってくる。だから、「われら」ではなくて、「われ＝われ」で考えよう。私は『われ＝われの哲学』（47）という本を書いたことがあります。『小田実評論撰3』（48）にも収録されています。「われ＝われ」は、「一人でもやる、一人でもやめる」という勇気をもった一人一人の「われ」で構成される。決して、「われら」に収斂されない。

そうした「現場」の判断の条件について、私が考えていることをこれから話します。まず、「される側」から考える、ということです。「市民」は「される側」、「殺される側」です。それに対して、権力者は「する側」です。小泉純一郎は「する側」だから、「日朝国交回復が前提だ」と言う。外務省は、「安否情報を得る」のが前提でしょう。そこを狡猾な金正日（キムジョンイル）（49）に逆手にすくわれた。「それなら安否情報を出してやる」と。安否情報に関する外務省の内々の感触は、要するに五、六人の名前を出して、あとはぼやかすということだったはずです。ところが、多数の人が死んでいるという情報が出てきて、愕然とした。向こうは強い。「安否情報は出した。アイ・アム・ソーリー（I am sorry.）」と言えばいい。「される側」の拉致家族の

99-102 頁。

41　福田康夫（1936- ）が小泉内閣官房長官時代の 2002 年 5 月 31 日の記者懇談会で，将来における核保有と非核三原則の見直しの可能性に言及したことを指す。

42　小田実「もと『フルブライト留学生』として今アメリカを考える（西雷東騒）」『毎日新聞』2002 年 9 月 24 日。『西雷東騒』108-111 頁。

43　James William Fulbright（1905-95）。連邦下院議員（1943-45）。連邦上院議員（1945-75）。

人たちは当然怒ります。

日本人の特徴のひとつに、「される側」の人たちが進んで「する側」の立場で考える、という奇妙なことがあります。私が市民集会でしゃべると、必ず「小田さんの言うとおりにやったら日本国はつぶれます」と立ち上がる人がいる。「あなたは総理大臣か」と言ってやります。何でそのへんの煙草屋のおじさんが、総理大臣の身になって一生懸命考えるのか。なぜ「される側」の人間が、わざわざ「する側」に回るのか。こんな国は日本だけです。

もちろん「される側」がすべて正しいとはかぎらない。しかし「あっちもこっちも大事です」と言っていたら、永遠に埒は明かない。右を見て左を見て「明日やりましょう」と言っても、明日になれば誰も来ない。

次に大事なことは、「知的であること」です。皆さんは大学生なんだから、知的であってほしい。「知的である」というのは、大きな広い円のなかでものを考えること、そして大きな時間的な広がりのなかで考えることです。そのために知識が必要になるわけです。

もうひとつ必要なのは、「ヒューマン・イマジネーション（human imagination）」です。「イマジネーション」のもとは知識ですが、知識には自ずと限界がある。知識を超えて「人間的想像力」を駆使して考えなければいけない。

皆さんが会社に入ったら、儲けのためには嘘をついたほうがいい、シュラウド（50）

44　中山千夏（1948- ）。作家。元俳優，タレント。元参議院議員。

45　中山千夏「私がニュースを嫌悪する理由」『総合ジャーナリズム研究』39 巻 3 号, 東京社, 2002 年 7 月。

46　東京電力の柏崎刈羽, 福島第一, 福島第二の三原発の 13 基で, 1980 年代から 1990 年代にかけて, シュラウド（炉心隔壁）のひび割れなどのトラブルについて，修理記録の改竄や虚偽報告など 29 件の不正が内部告発によって暴露された。原子力資料情報室『検証　東電原発トラブル隠し』岩波ブックレット，2002 年，参照。

のひび割れも隠せ、ということになるかもしれません。ところが大きなコンテクストで考えてみれば、そんなことをしていれば、結局その会社自体がつぶれます。大きな広がり、大きなコンテクストのなかで、将来を見据える。そのときの原点は、「人間」にとって何の意味があるのか、です。

四　イラクと北朝鮮

まずアメリカのイラク攻撃については、絶対に反対すべきだと私は思う。私は「声明」を出しました。

誰がどう考えても、
アメリカがイラクを先制攻撃するのは間違っている。私たち、日本、世界の市民は反対する。
アメリカは国連からの孤立も辞さないし、核による無差別攻撃の可能性さえ明言している。
日本はアメリカともイラクとも友好関係を保つ国である。
日本は、その立場で、一方的にアメリカのイラク攻撃に加担してはならない。
日本は、両国の間で仲介の労を惜しまず、あらゆる戦争行為をやめさせるようにせよ（51）。

47　小田実『われ＝われの哲学』岩波新書，1986 年。
48　小田実『小田実評論撰 3　80 年代――「われ＝われ」の哲学など』筑摩書房，2001 年。
49　金正日（1942- 2011）。朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）国防委員会委員長，労働党総書記。
50　本章註 46 を参照。
51　良心的軍事拒否国家日本実現の会（代表・小田実）「アメリカ合衆国のイラク先制攻撃に対する声明」（2002 年 9 月 11 日）。

つづきは製品版でお読みください。